国　語

発達段階を見通して育てる読む力のあり方をさぐる

1．国語科で願う豊かな学びの姿

本校国語科では，幼小中一貫教育を進める中で，11年間の発達段階を考慮した国語学習がいかにあるべきかを，授業実践を通じて探ってきた。以下は，中学校３年生生徒の学習のふりかえりにみられる，学びの姿の一例である。

> 「新しい博物学」の時代を読んで，全く関係なさそうな分野同士が意外にも関わり合っているのだということがよくわかりました。藤原定家が日頃から天文現象を観察し続けていたこともですが，（超新星爆発）に関する過去の記録も調べた上での正確な記録だったということにも驚きました。
>
> （古典と天文学のような）種類の違う学問同士の結びつきで今まではっきりしなかったものが明らかになるということから，日頃から偏った見方ではなく，広い視野を持つように努めなさいということを（筆者は）暗に伝えたいのだと思います。毎日の授業や，友達とのつきあい方にも通じることだと思いました。
>
> 〈　中　略　〉
>
> 異なる分野が関わり合っている意外な例として「味の素」はなるほどと思いました。化学の分野と家庭科の分野が関わっているいい例だと思いました。家庭科は，栄養などで化学と関わりがあるのも納得できます。でも，そこまで意外な感じは受けなかったので，もっと意外な分野同士のつながりについても知りたいと思いました。

これは，説明的文章「『新しい博物学』の時代」のまとめとして生徒が書いたものである。天文学単独では明らかにならなかった超新星爆発の時期が，古典「明月記」の記述により特定されたという事例についての新鮮な驚きが表れている。また，この文章は学問の総合的な結びつきの可能性を述べているが，この生徒は読み取った内容を，発展的に自分のこととして理解し，自己の生活と結びつけて述べている。後半は，異なる学問分野が結びついた例を身近なところから探し，生徒どうしで情報交換を行ったことについての記述である。他者の情報を理解し，認めつつ，更に追求したいという意欲的な姿勢を見て取ることができる。

読む力を高めるということは，情報を正確に取り出したり，文章を肯定的にとらえて理解したりするだけではなく，文章の内容や筆者の意図などを解釈することが必要となる。さらに，その文章について内容，形式や表現，信頼性や客観性，論理的思考の正確性等を理解，評価したり，自分の知識や経験と関連づけて発展的な考えをもったり，建設的に批評したりするような読みを実現することも大切である。

本学校園の国語部では，ことばの学習，特に「読むこと」の学習を通して，子ども自身が自己の変容をとらえる機会を大切にし，学校行事や日常のさまざまな関わりと結びつけたりしながら，よりよい言語生活や社会生活を送ろうとすることのできる子どもの姿をめざしている。

2．昨年度までの研究の経緯

国語科では，これまでに児童・生徒の漢字についての知識・理解の程度や視写の実態を調査し，スキル面での実態把握を行ってきた。基礎・基本的なスキルをどのように定着させるか見通しをもつために，現在も調査を継続中である。

また，昨年度は，発達段階ごとに大切にしたい言語習得の姿を，３ブロックごとに次のように仮定した。これは，子どもの成長過程における言語習得の順序を示すものではなく，それぞれの段階でつけたい力と，そのための学習活動を見出したりする上での指標である。また学習の中で子どもをとらえる上での指標としても考えられる。

①初等部前期	読み聞かせ等を通じ，主として音声からことばを習得する。 【音声と事物・事象とのつながり】 音読を繰り返したり，文字で書いたりすることを通してことばを習得する。 【音声と事物・事象と文字とのつながり】
②初等部後期	理解したことばの意味を，様々な言語活動を通じて何度も繰り返しながら触れることで，自分のことばとして習得する。 【抽象的なことばの意味とのつながり】
③中　等　部	様々な言語活動を通じて，抽象的な感覚や概念をことばで獲得したり，より豊かに表現したりする。 【ことばの概念（多様性）と表現とのつながり】

このことをふまえ，各段階で大切にしたい学習過程と子どものとらえを次のように考え，「読むこと」の実践を行ってきた。

○初等部前期

初等部前期前半の時期は，身の回りの豊かな経験から紡ぎ出されるあらゆることばが，生きた学習として成立する。この段階ではまず保育者や友だち，あるいは自分自身が発する音声言語と，具体的な事物，事象などを結びつけることを大切にし，絵本の読み聞かせなどを通して，絵とことばとを結びつける場面での子どもたちのつぶやきをしっかりととらえていくようにした。

初等部前期後半は，小学校低学年に相当する。この時期は，音読や書くことの基本姿勢を確実に身につけることを大切にしながら，読むことに対する興味関心を培ったり，その他の国語学習の基礎を養ったりする。この時期は，文字を読んだり書いたりする学習に取り組みはじめる段階であり，学習活動の中で子どもがどのように文字言語を読み取っているか，その姿勢をとらえていくようにした。例えば，物語の叙述を動作化したときに，どのような動き方をしているのかを見取ることで，その子の読みをとらえる，また，生活体験も豊富になっていく中で，自己の体験なども重ね合わせながら，読み取っていく姿をとらえるということである。

○初等部後期

この時期は，子どもが具体物を表現することばに加えて，徐々に抽象的なことばを獲得していく時期と考える。従って，抽象的な感覚や概念などを表すことばにも子どもたちの目を広げていく。文章で表されていることを図式化したり，絵で表したりするといったように，読み取りの手段としてより多様な学習活動を取り入れながら，子どもの読み取り方をとらえるようにした。

また，この段階では，音読や書くことの繰り返しにより語彙を増やしたり言語感覚を身につけたりすることも重要である。また，文章の記述に即したとらえ方ができるように心がけ，文章を読み取って生まれた自分の考えがどのことばから派生しているのか，その根拠を明らかにしながら表現するような活動もこの時期からは大切にする。

○中等部

この時期は，これまで，ことばと体験とのつながりで理解できたものが，ことばからだけでもイメージすることができるようになる時期であると考える。子どもには，ことばの微妙なニュアンスをとらえたり，使い分けたりする力が大切になってくる。これまでに培った読みをベースに，抽象的な感覚や概念をことばから獲得したりことばで表現したりすること（より正確に，より豊かに）をいっそう洗練させていく。教師は，学習活動の中で子どもの考えや発言に対しより細やかに耳を傾けながら，できるだけ言葉を咀嚼させ，子どもたちに個々の読みの違いを意識させたり，ことばにこだわりをもって表現させたりするようにし，子どもが互いの考えの違いに気づいたり，互いを尊重し合うような国語学習につ

なげることを目指した。

このように，それぞれのブロックで大切にしたい視点を定めたことにより，子どもの学びの姿を焦点化してとらえることができるようになった。子どもは，学習に興味をもったり，学習内容を理解したりする能力が高く，読むことに関しては，楽しんで読み，学習課題にも積極的に取り組むよさをもっている。反面，中等部に進むに従って，内容を理解する力は向上するものの，他とかかわって読み深めようとする意欲については弱くなる傾向があるととらえた。具体的には，文章から読み取ったり思考・判断したことを表現するときに，発言意欲はあるものの，他者に伝えようとする意識が希薄であったり表面的な発言にとどまっていると感じられることが多い。また，文章から内容を読み取ったり簡単な感想をもったりする表面的なレベルでの思考・判断はできるが，さらに発展的に考えたり，表現したりすることへの抵抗が強いといった傾向もある。意見を交換し合ったり，話し合ったりするような学習活動が，他の考えを取り入れて自己の読みを更に深めていくまでに至らず，自己内での読み深めで完結している場合が多いと思われる。逆に言えば，学習活動における子どもの思考・判断・表現が他者のそれとより広く深くかかわっていくことで，より生きた学習につながることが考えられる。

3．本年度の研究

読みを広げたり，深めたりするためのかかわり合いのあり方について

(1) 思考力・判断力，表現力について

本部会では，国語科における思考力・判断力・表現力について，学習や日常の言語活動では思考・判断が同時に行われたり繰り返されたりする場合が多いことや，思考力・判断力は，筆者や話し手・聞き手の意向などを読んだり聞いたりして「理解する活動」及び，話したり書いたりして「表現する活動」に総合的に表れるとの考えから，大きく「思考力・判断力」と「表現力」の２つに分けた上で，それぞれを次のように仮定した。

（ｉ）思考力・判断力 様々な言語材料に含まれる意味や考え・意図等に基づいて，直感を働かせたり，論理的に考えたり，想像をふくらませたりして，自分の行動などの方向や方法を見出す能力 （ii）表現力 自分の考えなどを整理して，表現形式を思考したり判断したりしながら話したり書いたりする能力

知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力，表現力を養うためには，まず授業の中で，何のためにその文章を読み，どういうことをめざすのかといった目的を明確にした学習が必要である。次に，文章を単に読むだけでなく，思考力・判断力と連動した形で読む力を高める取り組みを進めたい。例えば，自由記述に不慣れな子どもには，授業のまとめの時に，自分の考えを簡潔に書かせるなどの日常的な工夫も必要であろう。さらに，こうした活動をふまえて，自分の考えを所定の字数・様式にまとめて表現するなどの活動も重視する必要がある。つまり，文章を読んで理解することによって得られた知識について，実生活や行動と関連づけて表現する力を高めるとともに，他方で書いたものを更に深めることを通して読む力を高めることが期待される。このように，思考力・判断力を中核として，読みの力・表現する力を総合的に高めていくことが重要であろう。

(2) かかわり合いのあり方について

本部会では，思考力・判断力，表現力を育てていく上での，有効なかかわり合いを次のように考え，効果的に学習の中に位置づけていきたい。

○初等部前期

教師と子どもとのやりとりを，学級全体での話し合いや，かかわり合いの最小単位であるペア活動につなげたりして，通して様々なかかわり合いの学習の素地を作ることが重要である。

○初等部後期

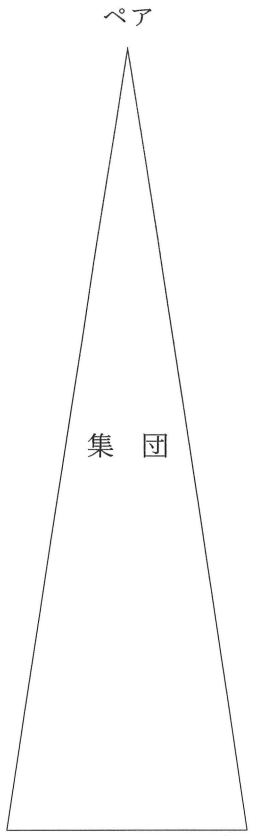
次第に他者の発言に対して関心が向くようになり，集団でのかかわり合いができるようになる。この時期の終わりには，読みに広がりも出てくるため，より多くの人数でも対話が可能だと思われる。

○中等部

言葉とイメージを結びつけたり，自己の内面と照らし合わせたりして読みや表現する内容も深まるが，発達段階の特性から，自分を表現することへの抵抗も増すため，小グループのかかわり合いが有効になると考える。また，これまでのあらゆるかかわり合いを臨機応変に取り入れることも可能となろう。

これは，11年間の発達段階を見据えたかかわり合いの流れでもあり，中等部の最終段階では，ペアから集団まであらゆる伝え合いの活動が成立するよう，段階的に指導していくべき内容でもある。伝え合いを成立させるためには，文章を介したかかわり合いから次第に脱却し，自分の言葉で相手と向きあいながらかかわりをもたせる必要があろう。ただし，それぞれの段階でかかわり合いの方法については柔軟に対応していくようにしたい。

以上のことから，３ブロックの指導過程と思考力・判断力，表現力を育てる学習活動を考え合わせると具体的に次のような例が考えられよう。

ブロック	学　習　活　動	かかわり合いの形態
初等部前期	○読んだり聞いたり，体験から感じ取ったことを表現する。 （例）日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や絵，身体等を用いて表現する。	
初等部後期	○事実を正確に理解し伝達する。 （例）身近な事象の観察や見学などの結果を記述・報告する。 ○記述をもとに根拠を明確にして伝達する。 （例）間接的な表現や他との関係をとらえたりしながら表現する。	
中　等　部	○概念・法則・意図などを解釈し，説明・活用したりする。 （例）学習活動の中で得た知識を日常生活の他の例に置き換えたり，日常生活に活用したりする。 ○互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させる。 （例）問答やディベートの形式を用いて議論を深め，より高い解決策に至る経験をさせる。	

本部会では，引き続き「読むこと」の実践を通して，他者との豊かなかかわりから自己の読みをより深めようとする子どもの姿をとらえていきたい。

（文責　川井　史生）